

特集

呼吸器薬物療法 —現場ではこう使いこなす—

呼吸器疾患は感染症、腫瘍、間質性肺炎などのびまん性肺疾患、喘息・アレルギー、COPD、膠原病、多くの希少疾患など極めて多岐にわたり、呼吸器科医が使いこなすべき薬も非常に多く、若手医師にとっては最新の治療法を習得するのはなかなか大変である。

鎮咳薬・去痰薬や気管支拡張薬は以前から呼吸器外来で使用する頻度の高い薬剤であるが、診断や症状による使い分けに注意を要する。気管支喘息やCOPDにおいては吸入薬が治療の中心となっているが、吸入ステロイド、LAMA、LABA、各種合剤が上市され選択に迷うことも多く、また特に高齢者では丁寧な吸入指導が必要である。高容量吸入ステロイドでもコントロールできない難治性/重症喘息に対する抗体製剤も4種類が使用できるようになり、使い分けが必要となった。呼吸器科医は各種抗菌薬・抗真菌薬に精通することが求められるが、非結核性抗酸菌症が増加していることから抗酸菌治療薬に対する知識も今なお重要である。肺癌治

療は分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が導入されて進歩が著しく、殺細胞性抗癌剤や放射線治療との組み合わせを考慮して最良の治療法を選択する必要がある。膠原病による肺病変を呼吸器科で治療することも多いが、ステロイドや免疫抑制薬の用量調節や副作用管理には十分な配慮が必要となる。また臨床現場では疼痛緩和薬や漢方薬も必要に応じて使いこなすことが求められ、比較的新しい領域である肺高血圧症治療薬や肺線維症に対する抗線維化薬も今や呼吸器科医にとって必須のものとなっている。

この企画では、呼吸器科医が知っておくべき各領域の薬（鎮咳薬・去痰薬，吸入薬，気管支拡張薬・キサンチン，抗アレルギー薬，喘息治療における抗体製剤，抗菌薬，抗真菌薬・ニューモシスチス治療薬，抗酸菌症治療薬，漢方薬，癌治療薬，疼痛緩和薬，ステロイド薬・免疫抑制薬，抗線維化薬，肺高血圧症治療薬）に関して，各薬剤の特徴や問題となる副作用などについて，第一線で活躍中の臨床医に解説していただいた。特に肺癌化学療法については変遷が著しいので，最新の標準治療についての総説も加えた。

執筆者の豊富な経験に基づく実的な使い分けにも言及しており，レジデントや若手医師のみならずベテランの呼吸器科医にとっても知識の整理に大いに役立つものと自負している。

大阪府済生会吹田病院 院長補佐・呼吸器病センター 長 澄人